

## 2019 年度平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業

## 「HIROSHIMA and PEACE」

Tara Rosell (マンチェスター、英国)

広島で過ごした時間はこれまでまったく経験したことのないものでした。なによりも目が開かれる刺激的な 2 週間でした。私は核兵器について同じような考え方をもち世界中から来た人たちに会いました。これにより多くを学ぶ機会を与えられました。まず、異文化間のコミュニケーションの重要性を学びました。勉強会の初めには、出席している部屋に存在していたさまざまなコミュニケーションスタイルについて学びました。たくさんの文化圏の人たちと勉強することになったので、相手の文化のコミュニケーションスタイルに誠実に向き合いながら、全員が会話に参加して関わるができるようにすることが大切でした。これはゆっくりしたペースで休止をはさみながら、または早いペースで何度も中断しながら行われたかもしれません(図 1)。そうしたセッションのおかげで、話し合いに参加する全員が意見を述べる機会を与えられ、異なるコミュニケーションスタイルに難儀しそうなために「消えて」しまう人がいないように、待ったり意識的に努力したりすることができました。こうしたコミュニケーションスタイルを知ることで、核兵器に関する考え方をコースの内外で有効に表現するためには、異なるコミュニケーションや慣習的な決まりごとを認識することが不可欠だと理解できました。

図 1—コミュニケーションスタイルの表

コミュニケーションスタイル	説明
ボーリング	競技と同じく、1人が話をして、その他は自分の順番を待つ。全員、指定された順番が回ってきて中断されずに話をするようになると思われる。
バスケットボール	誰かがボールを持っている場合、その人が話ができる。ペースはやや速いものの、躊躇すると誰かがボールを奪い、それによって話を始める。
ラグビー	このコミュニケーションスタイルは参加性が高い。途中で話を奪われる、つまり中断が多くなる。このコミュニケーションスタイルの人たちは遮られることを予想しており、矢継ぎ早にトピックが変わることがある。

第二に、1945年の出来事に対する日本人の視点は大変勉強になりました。これにより、原爆の社会的影響、約8万人の家々と住民が一瞬で全滅させられたことを掘り下げました。さらに、原爆の影響はそこで止まらず、大気中の放射線は現代に生きる民間人とその子孫の両方にさらなる犠牲者をもたらしました。この点を学ぶことで、原爆の影響へのより一層感情的な想いをいただくようになりました。広島平和記念資料館に行って負傷者の鮮烈な画像を目にし、被爆者（原子爆弾の生存者）の話聞くことで、広島が被った苦しみと惨事がまざまざとよみがえりました。こうした側面から見たストーリーは見落とされることがあまりに多く、「成功を示す」統計によりアメリカの勝利と見なされています。

第三に、核戦争の廃止に関する見解を確実に届けるため、私たちの都市が行なっている取組について学びました。広島でその他の「平和首長会議」参加者と近しく生活して学ぶ機会は、その他の都市の取組や核戦争の廃止への関わり方について聞けることを意味しました。例えば、イランには1,000以上の加盟都市があり、2015年にはリスク管理と災害に直面した際の都市の脆弱性を低減し、都市の公共安全性を強化することを目的としたテヘラン防災センター（Tehran Disaster Resilience Center/TDRC）を創設したそうです。世界中で起きていることを聞いて学ぶことは刺激的であり、そうした場所を故郷と呼べる人たちとともに時間を過ごせたのは喜びでした。

学んだことに基づいて私が計画していることは、2つの主要なアイデアに分けることができます。第一に、コミュニケーションと独自の計画を通じて、核廃絶の重要性への意識向上に向けたマンチェスターとイギリスの取組により深く関わることです。仲間や同僚、そして家族とのコミュニケーションを通じて、意識を高め、広めていくつもりです。広島での経験とそれが私に及ぼした影響を伝えることで、これを行なっていきます。被爆者の観点から話を伝えることに力を入れ、核攻撃を単なる一連の統計上の数字としてとらえる理解を排除することに重きを置くつもりです。キノコ雲の下では、1都市の人口まるごとの家族と家屋が消し去られました。これは当時から私たちが遠く離れるにつれ、実感がうすれがちな視点ではないかと感じます。だからこそ、私は若者に核兵器について教えることの重要性を深く理解し、今後も関わり続けたいと考えています。

さらに、このコースのおかげで、核戦争の禁止に尽力する人たちと会うことができました。その1人が80,000ボイスのCEOでした。この組織はICANと平和首長会議と協力し、核禁止をめぐるメッセージを完全に再点火するパフォーマンスの制作に向けて活動しています。イギリスへ帰国してから、私は80,000ボイスでしばらく活動しました。若手の核禁止支持者として、今後数年にわたり、同組織とその計画に引き続き関わっていく予定です。

核兵器廃絶への具体的な提案として、青少年平和交流プログラムの継続の重要性が挙げられます。今回の経験は、私や仲間の研究者たちが核戦争の問題について闊達に見識をもって議論できるよう、見方や意見がより知識に裏付けられたものとなる素地をもたらしてくれました。このコースは核戦争の多くの側面を真に理解するための情報を与えてくれました。そこには核兵器そのものの成り立ちと、世界中でなぜこのように異なる核兵器の捉え方が存在するかも含まれています。こうしたプログラムは、広島での没入的な体験を活かし、核戦争

の危険性についての言及を広めるパワーを若者に与えます。このメッセージを広め続けるには、交流プログラムの継続が最も重要です。

第二に、平和首長会議は、進んで変化を起こし核戦争への挑戦と追悼のあり方に関わろうとする組織を受け入れ、支援すべきだと思います。重要なのは、1945年から遠く離れつつあるなかでメッセージの深刻さと重要性が失われてはならないということです。ついては、追悼についてのアイデアが認められ、受け入れられることが不可欠です。メッセージを引き継いでいく最も効果的な方法は、若者の関与を通じて行うことです。80,000 ボイスなどの組織はパフォーマンスを通じて若者の間でメッセージに再び火をつけようとしています。核戦争を終わらせるため、その推進力として求められているのは若者だと思います。若者のつながり方や発言はこれまでとはまるで違います。したがって、1945年をこれまでと同じ形で追悼し続けたいと思うのは当然かもしれませんが、核廃絶をめぐる新しい考えを認識し、核禁止の推進力を再び覚醒させることには利点しかないのです。